

紅蓮地獄③ 気絶と蘇生

池に沈んだ男が最初に見たものは、泥に横たわっている巨大な蓮根であった。

蓮根の中は暖かそうだ。しかし、超満員。ひとりの隙間もない。

収容者たちは、凍傷した腫れものを犬のように舐めあっている。温かい舌が、傷口をきれいに治してくれるからである。すっかり癒えた者は、部屋の暖かさにまどろみ、居眠りをしている。

全員の皮膚が癒えたころ、赤鬼と青鬼が、ドスン、ドスンと、金棒を突きながら勇ましく入ってきた。

「やい、外へ出ろ。次が待っている」

全員が強制的に追い出された。外に出るや、たちまち手足が凍傷。皮膚から血が滲み出し、全身に紅蓮華が現れた。まるで蓮の華が急に芽吹いたようだ。割れた皮膚から紅蓮華がパツクリと開き、冷たい疾風が針のように突き刺す。

空になった蓮根の穴へ、紅蓮華に腫れあがった新人が流れ込んできた。

「おお、暖かい」

「ここは極楽だ」

「とろけそうだ」

やがて、お互いが腫れものの紅蓮華を舐め始めた。

まどろむ者もいる。

そこへ、鬼たちがやってきた。

「やい、外へ出ろ。次が待っている」

部屋の入れ替えは、いつ終わるともしれずに、延々と繰り返されている。

かつて大焦熱地獄では、煮え湯を飲まされ、舌を抜かれ、針の山で串刺しにされ、胴体を切られた。気絶すれば、鬼に息をふきかけられ、蘇生する。

詐欺を犯した者は、木に縛り、ペンチで舌を挟み、舌を引っばる。嘘をついた数だけ舌の表面を槌でトンと打っていく。薄く、薄く、どこまでも薄く伸ばされていく。一メートルほどに伸びきった舌は、紙よりも薄い。その舌を切り株の上に貼り付けて、竹の釘を打つ。

多淫の者は、ここでも異性を追い求める。針の葉がしげる梢に女がいる。針の木を登ってゆき、登りきれば女は消える。そして、女が根元に現われる。ふたたび針の葉に搔きむしられながら降りていく。女も、男も、その繰り返しを、狂ったように続けている。

地獄は、生前の妄念や罪過が、具体的に、極端に、何度も体験できる場所である。

あの大焦熱地獄と同じような責め苦を、ここ紅蓮地獄でも行なっている。生前中に犯した罪の数だけ、繰り返し、繰り返し、ここで業を果たさねばならぬ。すでに三百年を経過した者も、ごろごろとしている。

天空から細い銀の糸が、無数に垂れ下がっている。

業風に翻る糸に、すがりつく者が大勢いる。まるで操り人形だ。空中を乱舞しながらも、やっと黒雲までたどり着き、雲の中へ消えていく者もいる。しかし、ほとんどの者は途中で糸が切れて落ちる。その墜落が黒い雨のように見える。

ときどき、蓮の葉っぱから雫がしたたり落ちてくる。蓮の葉に落ちた雨がしばらく転がり、紅蓮地獄に落下してくる雫である。

ところが、雫のなかには、いつまでも葉の上で転がっている奇特な水玉もある。ころころと転がって、水滴が磨かれてゆく。その水玉は泣涕の雫となって、日光に輝き、やがて水蒸気に化して昇天していく。

け、け、け、け、け……………